

学位被授与者氏名	副島 悠史 (そえじま ゆうし)
論文題目	中日数量表現の比較研究
論文審査結果の要旨	<p>冠詞のない言語として中国語及び日本語の量詞（助数詞）が両言語の名詞の意味・用法と数量名構造を考察する際の重要ポイントになる。また両言語における量詞に似たようなものもあれば、異なるものもあり、これまでの教育や学習の重点になっている。先行研究に大河内康憲「量詞の個体化機能」(1985)は中日量詞比較研究の嚆矢となり、中川正之・李俊哲(1992)、橋本永貢子(2001)などの対照比較があるものの、常用量詞をはじめ、全種類の量詞のすべての用法についての考察はまだ中日辞典に越えるものは見られていない。本論文は量詞を含む構造における文法的な機能について考察と比較は従来の研究のやや弱い面の補充として評価できる。</p> <p>結論としての「集合量詞の重ね方が主語となった場合は必ず“都”を必要とする」「動量詞の重ね方は複文の後半でしか使用できない」などのまとめ及び中国語での世界で唯一な人物やものにも“一+量詞”を付ける現象に対する解釈は、再考の余地がないわけでもないが、修論レベルの試みとしてその方向性が認められる。</p> <p>本論の筆者は日本語母語者で、大量の中国語の用例を選別し自力で訳されたが、中国語にも日本語にもかなりの誤字・脱字が見られ、学術論文としてより厳密的なチェックをしなければならないと思われる。また量詞に対する全面的な研究としては、考察に及んでいる量詞の数量とカバーする範囲とも十分とは言えないと思われる。</p> <p>平成25年2月21日に、北九州市立大学北方キャンパス3号館320教室において、審査委員全員出席のもとで最終試験を実施して学力を確認し、論文の説明を受け、質疑応答ののちに、全員一致で当該論文が修士(中国言語文化)として十分な内容であると判定した。</p>